

巻 頭 言

関西学院大学は1月に阪神淡路大震災から26年目を迎えた。23人の学生・教職員を失い、苦難の中で教育研究活動を継続された先人の尽力を覚える。

当時、私は大学院生で東京都大田区に住んでいた。修士2年目を終えようとしていたが、修士論文の提出は3年目とすることをすでに決めていた。毎週火曜日午前は指導教員のゼミがあり、輪読の担当箇所や自分の研究計画の発表があたっている場合、月曜の夜から徹夜で準備をし、大学に到着後、急いで人数分コピーを取るのがルーティンだった。1月17日は火曜日だった。英書の翻訳だったか、自分の修論構想であったか、今では忘れてしまったが、その日も床につく余裕はなく、準備に時間がかかり、結局、明け方近くになってしまった。

5時46分、大森でもジャケットやコートを掛けていた突っ張り棒がずれ落ちるほどの揺れを感じた。横浜・震度2、東京・震度1というのが、兵庫県南部地震の記録である。眠気で頭もぼーとしていたことは間違いないが、体感的には震度2〜3程度の揺れだった。床に落ちた洋服をととのえる気力もなく、NHKニュースを見て、近畿地方に大きな地震が発生したということに気づく。普段、電話をかけることはめったになかったが、大阪の実家にかけてところ、幸い輻輳前で、家族の無事を確認できた。やるべきことに戻り、漸く配布資料を完成させて、ゼミに向かう。授業が終わり、いつも通り、ゼミメンバーで昼食となった。蕎麦屋のテレビで、阪神高速の倒壊と長田に立ち上る火の手の映像を見ることになる。以来、廣井脩先生のご指導の下、災害情報の調査研究に携わるきっかけとなった。

さらに2ヶ月後、東京都心は地下鉄サリン事件の悪夢に見舞われる。3月20日は月曜日であったが、風邪気味の体調不良のため、午後からの通学としたことで、結果として難を逃れることとなった。自らを研究者の道に誘ったともいえる80年代以降の人文社会系の論壇、思潮に大きな違和感を抱きはじめていた私にとってメディアとテロリズムの関係を考える契機となった。

社会調査の使命には、パネル調査のように肉眼では探知が難しい時代の転換点を見出す役割と同時に、時代を画する事件や出来事に即応する役割があると思われる。いつの時代も若手研究者はそうした研究の端緒を開くものだ。今号も若手研究者により、静かに進行する日本社会の変容とコロナ禍の課題にダイレクトに挑む論考と特集が編まれた。収束への道半ばである現在、ポストコロナ社会を考える一助となることを願う。

2021年3月 関西学院大学先端社会研究所 所長 森 康 俊